

かつて日本一「鹿島路のタブノキ」の今昔 (羽咋市鹿島路町)

かつて環境庁の調査(1989年)で日本一と言われたタブノキが、羽咋市鹿島路町に生育しています。

羽咋市の天然記念物として1963年(昭和38年)に指定され、当時の形状は樹高20・20m、胸高周囲9・82m、幹2m上6本立ち、推定樹齢650年でした。

現在の形状は、樹高8・4m、胸高周囲9・2mで、幹の太さ以外は指定当時の面影は全くありません。

なお、胸高周囲については、指定時と測定方法が異なるため、ほぼ変化していないと考えます。

鹿島路のタブノキがなぜ、そうなったのか、調べてみました。

1981年(大正7年)発行の辻

敬二「加能老樹名木誌」には、「鹿島路の森の木(榎)と称され、形状は樹高20間(36・36m)、胸高周囲2丈5尺(7・57m)、樹齢600年で、この樹は一本でも一大森林のごとく見えるので、付近の者はこれを「森の木」と称して、その奇観を賞し

来る」と記載されています(写真1)。



写真1 加能老樹名木誌より

1977年(昭和52年)発行の里見信生「石川の林業誌」では、「最近は寄る年波に勝てず、次第に衰弱の傾向が認められる」と記述されており、写真2でもわかるように6本に分岐している幹の一本が、途中から切られています。枯損したのか、道路事情によるものかは定かではありません。



写真2 石川の林業誌より

1982年(昭和57年)発行の里見信生・鈴木三男「石川の巨樹」では、樹高20m、胸高9・5mと記されています。

1988年(昭和63年)発行の赤井重恭ほか「加能巨樹名木回診 あらさがし」では、詳細に腐朽の状況が述べられており、すでに大きな腐朽が進行していたことがわかります。

1980年前後に、この樹の横を流れる小川の護岸工事(コンクリート化)が行われ、工事に伴う根の切除などにより、腐朽が進んだものと考えられます。

1990年(平成2年)に入ってから3本枯れ、その後徐々に枯れ、残っていた一本も2016年(平成28年)に枯れてしまい、現在は短くなった3本の幹に、枝葉を保っている程度であります。

推定樹齢700年以上の本樹が、人的行為と対応の誤りや遅れにより、わずか40年で変貌してしまったのであります。

昔は、村人総出で巨知瀧から藻を上げて施肥をし、地域のシンボルである本樹をいたわり続けていました。2014年(平成26年)から、鹿

島路町会が本格的に保護に乗り出し、2018年からは、日本樹木医学会石川県支部が調査・保護に加わり、町会の皆さんと土壌改良を中心に活動にあたっています(写真3)。



写真3 保護活動の状況

この数年間の活動で、以前には見られなかった枝葉の伸長が見られ、

まだ予断は許されませんが、鹿島路のタブノキの樹勢が回復してきた手ごたえを少し感じられます(写真4)。

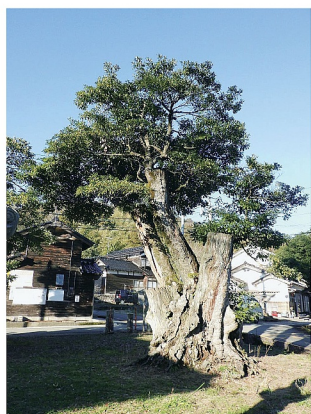


写真4 現在のタブノキ

「森の木」復活を展望した息の長い活動が望まれます。

※写真2と写真4は、ほぼ同方向からの撮影で見比べて下さい。

(石川県巨樹の会 正田國博)